

北斎が仕込んだ初鯉の食味

富嶽三十六景・神奈川沖浪裏

葛飾北斎が晩年の72歳の時に制作した木版画。
1831年(天保2年)頃に出版された名所浮世絵の連作『富嶽三十六景』の一つで、
巨大な波と翻弄される舟の背景に富士山が描かれている。
北斎の作品の中では最も有名であり、世界で知られる最も有名な日本美術作品の一つです。

葛飾北斎は崩れる大波の向こうに、残雪をいた
だく富士の姿を配した浮世絵を描いた。「富嶽三
十六景・神奈川沖浪裏」と題する木版画(右)は、
世界中で人気の作品だ。

江戸っ子は、この絵を見るたびに初カツオを思
い、食欲をそそられたのだ。

どうして富士山と大波でカツオを連想するこ
になったのか。

この画面の波間には3艘(そう)の船が見える。
左右の船縁(ふなべり)に4人ずつ、計8人の頭が
並んでいる。波と富士を見物する遊山客ではない。

この木造船は「おしょくり船」と呼ばれた。漢
字で書くと「押送船」。江戸湾を八丁櫓(はっちょ



うろ)で漕(こ)ぎ進んだ高速艇なのだ。

目指す先は、湾口部の三浦半島の沖である。地
元の漁師が釣り上げたカツオを海上で買い付け
ると、日本橋の魚市場を目指して全速力で戻る。

富士を望んだ往路と異なり、復路は北辰(北極
星)を目安に、暗い夜の海を北上し、日の出前に
鮮度のよい大量のカツオを日本橋に届けたのだ。

北斎は押送船の漕ぎ手を隠し絵のように配置し
ている。そして彼は、カツオに絡むもうひとつの
からくりを、この富嶽三十六景の画中に潜ませた。

それは大波、小波に躍動感を添える縞(しま)筋
だ。紺と薄青と白で構成されている。これは釣り
上げたカツオの体表に出現する色彩であり、文様

この作品は、縦 25.7 cm・横 37.9 cm の大判横絵として作られている。
大波、3隻の船、背景の富士山、と3つの要素で構成されている。構成は左上
隅にある署名によって補完される。

海は荒れ狂い、波の波頭が砕けるその瞬間を切り取っている。波の曲線は弧
を描き、背景の富士山を中心とする構図を形作る。波頭から飛び散る波しぶ
きは、まるで富士に降る雪のようでもある。奥の舟と波高はほぼ等しく、押送
船の長さは一般的に12mから15mであり、北斎が垂直スケールを30%引き延
ばしていることから、波の高さは10mから12mと推測できる。

だ。「鯉縞(かつおしま)」と呼ばれた着物の柄も
ある。

江戸時代の神奈川は、横浜に近い宿場町。その
海にこれほどの大波は立たない。大漁を予感させ
る北斎の誇張なのだ。

これらのメッセージは、時の流れの中で忘却さ
れていたのだが、釣魚史研究者によって解き明か
された。

「ようやく思い出してくれたかい」。北斎の安堵
(あんど)の聲が聞こえてくる。

日本を代表する世界的名画として名高いこの浮
世絵は、極東の島国の豊かな魚食文化が生んだ希
代の傑作であったのだ。(論説委員 長辻象平)

最新摺絵の版木の摩耗状態から明らかに数千枚は摺られており、当時から
人気が高かった事がうかがえる。その内数百枚が現存しており、これまでの研
究によれば、現存する本作品の摺絵は世界で上位20位くらいに入っているこ
とが示唆されている。摺絵の多くは日本や欧米の主要な美術館に所蔵されて
いるほか、個人収集家の所蔵品も存在する。

現代でもオリジナル摺絵を入手することは可能である。2003年3月7日にユ
ゲットベレスコレクションから摺絵の1枚が競売にかけられ23,000ユーロの値が
ついたほか、2002年には本作品を含む富嶽三十六景の46枚セットが135万
ユーロで競売に掛けられた。

摺絵の一部は1870年代後半にはヨーロッパに渡った。印象派の画家ゴッホ
が絶賛し、作曲家ドビュッシーが交響詩『海』を着想するなど、欧州の芸術
家達に影響を与えた。

20世紀以降もその国際的な著名度と印象の強さから、広く商業広告や大衆
文化に使用されている。